



青春淫奏曲

新任女教師の

ハ撮リ

記録

(1)

作 黒見 X 丁

青春淫奏曲

（新任女教師のハメ撮り記録）

1

作 黒見メイ

前書き

- ・この物語はフィクションです
- ・盗撮、盗聴は犯罪、同意のない性行為は犯罪です
- ・女性を軽視する発言がありますが、現実では女性を大事に扱いましょう
- ・童貞を見下す描写がありますが、現実では童貞には優しくしましょう

目次

第1章 ドキドキ遊園地デート

第2章 大山康太の屈辱

第3章 新任教師の墮とし方

第1章 ドキドキ遊園地デート

フグリランドは都内随一のテーマパークであり、敷地面積は主要ドームの十五個分に匹敵する。都内に住む者なら誰もが足を運ぶメジャーな遊園地である。

メリーゴーランド、コーヒカップ、物作り体験など子供の喜ぶ施設も揃っており、晴天の本日も家族連れ、修学旅行と見られる小学生の集団が見受けられる。

またジェットコースターにフリーフォールなど大人も楽しめる遊園地で、日曜日ということもあり大学生の姿も見受けられる。

そして一番のポイントは都内で一番大きな観覧車の存在だ。夜景をバックに告白し付き合い始めたカップルは数知れず。

そしてまた一人、フグリランドに若き男女が足を踏み入れる。

大山康太へおおやま こうた——二ヶ月前までは童貞でクラスでも目立たない男子高校生だったが、学年のマドンナ黒沢ユリの弱みを握って脅し、童貞を卒業。自信をつけた大山は筋トレを始め、見た目も凛々しく、筋肉質な男に生まれ変わった。

彼の後ろを付いてくるのは黒沢ユリへくろさわ——上記の理由で大山に逆らえなくなった彼女は処女を奪われ、そのまま大山に調教されてしまう。

学年で一番の美貌を誇る黒沢ユリは綺麗に整えられた長髪を揺らし、人を惹きつける大きな瞳、ツンと高い鼻、そして華奢な身体に似合わないDカップの胸の膨らみで、周囲の視線を集めていた。

「休日には人が多いな、イライラするぜ」

汗を拭いながら大山は早速、悪態をつく。

「仕方ないでしょ。我慢して」

クールに諭すユリだが、その言葉にはどこか遠慮がみられる。

なぜなら二人の関係性は恋人などという生ぬるいものではなく、圧倒的な主従関係。大山の命令に黒沢ユリは逆らえない。

今日のデートも大山の提案によるもので、恋人でもない相手との遊園地デートをユリは断れず、大山の好みの服を着て集合場所にやってきた。

ユリはシックな黒いワンピースに身を包んでおり、丈の長さは膝上と少しアダルトテイな格好だ。とても女子高生とは思えない着こなしだが、慣れていないのか普段よりも自信がないようにみえる。

そんなユリの心境を察し、大山は大きなユリの尻を触る。

「なんだよ恥ずかしがってんのか」

「ちよっ……人がいっぱいいるんだから、自重して」

大山はユリの言葉を無視して、ユリの片尻を揉みしだく。

夏服というだけあつて生地は薄く、触られれば直に素肌を触られているような感覚に陥る。



ユリは羞恥心と尻への刺激から頬を赤らめ、小さな歩幅で歩みを進める。

フグリランドの券売所で大山は二人分のフリーパスを購入し、二人の遊園地デートがスタートする。

「ほらよっ」

大山はユリへフリーパスを差し出す。

「……ありがとう」

ユリが受け取ろうとしたところで、大山はフリーパスを引っ込める。

「ああその前に、ちゃんと命令通りの格好で来たか確認してからだな」

下を向き、ユリは恥ずかしそうに口を開く。

「ちゃんと守ってる」

「んじやあ……向こうで証拠見せような」

笑顔で大山は人気のない場所を指差し、歩き出した。そんな大山の背をユリは黙って追う。

アトラクションのあるエリアから逆方向の茂みへ移動し、ユリは大きな木を背に立たされる。背後では遊園地に来た客の声が聞こえ、ユリは挙動不審に背後の様子を確認する。

「そんなにビクつくなよ、ちよつと確認して終わりだ」

ユリは意を決してワンピースを捲りあげる。

すると短いワンピースから尻の割れ目が覗き、次に生え揃った生々しい陰毛が姿を表す。足首から綺麗な臍まで、薄い生地一枚だけで守られた破廉恥な格好をユリは晒す。下から見られれば一瞬で陰毛も尻の割れ目も見られてしまう。そんな格好でユリは家を出て電車に乗り、遊園地まで訪れた。

今までの羞恥心はこの格好が原因だった。

「ユリが外でワンピース捲って陰毛晒してるよ」

大山が下世話笑いを浮かべる。

「確認したんだから……もういいでしょ」

さつさとワンピースを直せばいいものを、大山に従属しているユリは命令なしに捲り上げるのを止めることはできない。

「まだこっちの確認が済んでないだろ」

そう言うと大山はユリの胸元へ狙いを定め、中央部分を人差し指で撫でる。

「あつ／＼ ちよつと……／＼」

唐突な乳首への刺激にユリの口から淫靡な声が漏れ、途端にワンピースから二つの突起を浮かび上がらせ、勃起した乳首が主張を強める。

大きな乳房に二つのポッチ、冷静に見ればノーブラであることが丸わかりだ。

「胸も合格だな。直ぐに勃起してくれるから、わかりやすいぞ。それと最後

に……」

焦りと快感からユリは息を荒くする。その間に大山はユリの前に屈み、クリトリス部分へ小さなローターをあてがった。

「ちよつ、ちよつと大山君何して……」

「なにつて今日は露出デート。スパイスは必要だろ」
クリトリスに遠隔バイブを固定し、立ち上がると、大山は遠隔バイブのスイツチを音にした。

「あつ……ああつ、ちよつとダメェ//」

ユリから淫らな声が漏れ脚が震える。自然の景色とは不釣り合いの女の素肌が震え、誰もが服で恥部を隠す中、黒沢ユリだけは自分の恥部を曝け出し、顔を赤く染める。

「動作確認終了。んじやデートを楽しむか」

ユリは呼吸を整え、ワンピースを元に戻す。

最悪のデートの始まりだ……。

数日前、ユリは大山と初めてラブホテルに行き、一夜を共にした。一泊二日の内容といえ、集合した夕方過ぎから性行為を始め、一緒にシャワーを浴び、大山の身体を洗淨。そして流れでペニスも綺麗にし、湯船で二度目の性行為。

湯船を上がりベッドで雑談している間に、いつの間にかムーディーな雰囲気になり就寝前の性行為。

そして朝はフェラチオで起こせとの命令に従い、ユリは朝から大山へのフェラチオに勤しんだ。そして朝昼と一緒に食べ、夕方のチェックアウトギリギリに最後の性行為をした。まさにセックスだけのラブホテルデートだった。

その日からユリは完全に大山の雌豚として調教され、完全に大山の言いなりとなり生活するようになった。

とはいえ常に大山に好き好き言ってる命令されたわけではなく、あくまで黒沢ユリとしての人格を保ちながらユリは大山へ従属している。クールで澄ました

女が逆らえずに痴態を晒す姿を楽しんでいるようで、ユリとしては少し複雑な気分だが、常に大山に媚びる態度をとるよりはマシだと考えていた。

地図も見ずに道沿いに沿って歩いていると、入口直ぐの場所にメリーゴーランドが設置されていた。

「先ずはあれ乗るか」

ユリは表情を曇らせる。

大人びた性格のユリは子供っぽい乗り物をあまり好まない。メリーゴーランドに乗る年齢ではないと思い、拒否する。

「他のにしましょ。メリーゴーランドなんて……」

ブウウウン。

「あつ……//」

バイブが作動しユリはその場に蹲る。

